

行政参加の街づくり

鶴見区行政推進課 高安宏昌

「自主研修でもしてみようか」
誰が言ったかも今となっては覚えていないが、ちょっと日常に退屈していた、入庁三〜五年目の面々がその言葉によつて集まったのが、今回の我々の平成二年度自主研修のチームである。

業務外の自主研修ということで、物好きが集まって六区の区役所の多彩な課の職員同士が、良くわかっていよう、誰もわかっていないキーワード「街づくり」について考えてみようということになった。

しかし、ここで、我々はどうのような切り口でこのテーマに入るかという悩みに直面してしまつた。そこで、全員が区役所職員というメンバー構成の性格上、区へのこだわりをもち、いわゆる「区における街づくりの可能性」について考えてみたいとい

う事になり、今回のテーマ「行政参加の街づくり」が決定したのである。

最初に説明し忘れたが、この研修は本市の職員研修所の「行政問題自主研究」である。業務外研修なので、自由なテーマを設定し、アフターファイブに活動しなければならぬ。しかし、かえてそのために、日々の業務に追われることなく、日常疑問に思っていた一つのテーマについて、自由にじっくりと時間を活用できるのである。このメリットを最大限に利用して、他市町村に見学するなどのフットワークのよい研修を進め、二十四〜三十歳の我々の世代の目

十分を生かした、「街づくり」に関する何等かの提言ができればと思っている。

また、我々にとって心強いのは、我々の自主研とは別に、区の職員を中心とした、各区の「街づくり」について考える同

世代の仲間のネットワークが少しづつできつつある事である。

そこでは、十六区の「街づくり」の事例を研究する集りを設け、月一回程度定期的に、大学や市民のゲストも迎えながら幅広い視野から検討し合っている。

このような様々な動きが重なり合つて、職場の違う職員同士が「街づくり」について自由に語り合い、その成果について自分の職場に持ち帰れるようになれば非常に有意義であると私は思う。それに、そんなちょっと辛口のアフターファイブの過ごし方もたまにはいいものではないかとも思っている。

石けんは環境破壊を起すか？

アースデイかながわ連絡会

一〇七号で「地球を救う二二七の方法」について書かせていただいたところ、「合成洗剤ではなく、石けんを使う」という

項目は変更すべき、というご指摘を都市計画局の阿部さんよりいただいた。石けんカスが環境破壊をひきおこすのでカスの発

生しないLAS系の合成洗剤を使った方がよいのではないか、ということだった。私たちはご指摘をとんでもない思い、また、こうした場でいろいろな考え方の人と意見交換ができることをうれしく感じている。それとともに、二・三疑問に思うこともあるので、これを機会にぜひ阿部さんや市の専門家の方々に教えていただければ幸いに思う。

最初にご指摘の前提として、洗剤の主成分の生分解性はABSよりもLASの方が高いのももちろんだが、石けんはそれよりもさらに高い。また、今日ではLAS以外の主成分からなる製品がさまざまな形態で販売され、成分のあいまいな表示や使用法を誤りやすい濃縮タイプなど、問題は多様化していることをあげておきたい。

その上でまず、石けんカスが河川や水系の汚染源の一部になっていることはご指摘のとおりと思う。では、この石けんカスがどの程度、下水処理システムや自然環境に負担になるのだろうか。さまざまな汚染源がある中

で「公共水域のヘドロ」や「処理困難な汚泥」の発生がどのくらい石けんに由来しているのか、教えていただきたい。マンション等の排水パイプが詰まり、それが石けんのせいにされること、がしばしばあるが、よく調べてみると油や食物くず等が主な原因だったりすることがある。石けんカスは石けんの使用濃度が濃すぎる場合などに特に大量に発生するので、私たちは石けんの特性をよく理解して適切に使うことが大切であり、使用量を減らしたり使わないですませることがおおいと考えている。

今回は紙面の制約もあってそこまでは書けなかったが、データによっては「二二七の方法」の項目も書き方を変えていく必要が生じるかもしれない。ところで、私たちが合成洗剤ではなく石けんをすすめるもうひとつの大きな理由は、LASをはじめとする合成洗剤は、石けんに比べて人体や生物に対する毒性がケタがちに高いことからである。各種の合成洗剤に関する急性毒性（飲んだり触れたりしたときすぐに現われる

害作用)については、法的に規制されてこそないものの、多くの報告や文献による指摘があり、また、内臓障害などの慢性毒性や母体を通じて胎児への影響などが動物実験などから懸念されている。私たちの生活の中で、洗たくだけではなく食器洗いやシャンプー・歯みがきなどの大部分にも合成洗剤が使われていることを考えると、水系への悪影響とともに、私たち自身の身体への危険を感じざるを得ない。生分解性が良いこと、生命や環境に対する毒性は分けて検討すべき点で、たとえ水に溶け、下水処理場での処理がスムーズに進んだとしても、家庭から河川や海までの生態系の中で人体や生物に明らか悪影響があつては元も子もなくなると思うがいかがだろうか。

最後に、私たちが石けんの利用も魅力的だと思ふのは、廃食油の処理による地域資源のリサイクルを含む、できるだけ環境に負荷を与えないという視野をもった行動へと容易に発展できる点である。極論すれば、石けんは毎日の生活の中から自給し

うるモノであり、エコロジカルな生活の創造へ向けて何歩も前進できる可能性を持っている(市内でも廃食油から石けんをつくり使い、廃液を工夫して土へ還元している人たちが多く知っている)。その点で石けんは、石油資源に依存し地域で自給できないシステムを持ち環境への負荷を与えるだけの合成洗剤とは異なつて、私たち一人ひとりが環境に責任を持ちながらエコロジカルに豊かな世界へとつながってゆくひとつの手段と考えるのだがどうだろうか。

私たちは、単に合成洗剤の代わりに石けんを使えば環境汚染が解決される、とは考えていない。合成洗剤であれ石けんであれ、なるべく使わないことが望ましい。ご指摘のとおり、「一二七の方法」は完成されたものではなく、私たちは専門家ではないので、正確な情報を得て順次訂正していきたいと考えている。ぜひ(専門家とお見受けする)阿部さんのような方々からご指摘をいただきたいと思うし、より適正な情報を市民・シロウトに対して提供しながら、市民

とともに活躍して下さることを期待したい。

石けんと合成洗剤

公害対策局 島中潤一郎

調査季報一〇八号の読者のページに「石けんは地球を救うか」という一文が寄せられている。

その要旨は「合成洗剤といってもソフト洗剤は、石けんカスの発生しない分、石けんより環境に与える影響は少ない」として、調査季報一〇七号に載っていた地球を救う一二七の方法の五十番目の『合成洗剤ではなく、石けんを使う。』は誤りであるとの意見である。

しかし、この意見は合成洗剤が抱える別の問題を見落とされているようであり、また、事実に対する一方からの見解に基づき、石けんと合成洗剤のそれぞれが環境に与える影響を論じておられる。

化学的に合成された物質はできるだけ環境に放出してはならない、できるだけ人体に取り込まれない方がよいというのが私の考えの基本であり、これらの

観点からあえて反論させていたきたい。

まず、見落とされているのは、合成洗剤が河川や海域に流入した際、そこに生息する生物が被る影響である。合成洗剤は石けんに比べてはるかに低い濃度で魚類をへい死させることが知られている。また、魚類のへい死に至らないような低い濃度でも、水生生物のふ化や発育に影響を与えるとされている。特に分解性が優れているということでもソフト洗剤の成分として用いられるようになってきたLASなどの界面活性剤は、従来の合成洗剤に用いられていた界面活性剤ABSに比べて、この魚毒性は強いといわれている。実際、本市の河川においても、この種の界面活性剤が原因となったコイの大量へい死事故が発生したことがある。合成洗剤の使用が環境に与える影響を論ずる場合、このような問題が無視できないのではなからうか。

次に、石けんから発生する石けんカスは容易に分解されない厄介な代物であると述べている。実際のところ、石けんの主成分

である高級脂肪酸に水中に溶けている、マグネシウムやカルシウムが結合してできる石けんカスは、確かに水に溶けにくく、沈澱するが、その分子の構画上、バクテリアなどの微生物の働きを受けやすく、分解しやすい物質である。従つて、投稿者が主張されたように、それが直ちに公共水域のヘドロによる水質汚濁の原因や下水処理場の処理困難な汚泥の大量発生の原因とは言えない。

また、LASなどの生分解性に優れた物質を界面活性剤として使用するソフト洗剤が合成洗剤として出回つてきていることも、合成洗剤が環境に与える影響の小さい理由として掲げておられる。しかし、この「生分解性が良い」というのはあくまでも従来用いられてきたABSと比較しての話であつて、石けんの界面活性剤として働く高級脂肪酸の分解性に比べて優るものではない。

さらに合成洗剤には主成分である界面活性剤の他に、いろいろな助剤が添加されているのが普通であり、将来どのような添

加剤が使われるようになるかはわからない。

以上のような点をふまれば、現在の時点においては、石けんを使うことも、身の回りの環境を自らの手で良くするための手段の一つとして評価されるべきものではなからうか。

一〇八号アンケート

緑政局 緒賀道夫

- 1 今回の特集テーマについて
興味があった
- 2 今回の執筆者について
もう少し多彩に論じてほしい
かった
- 3 今回の内容について
ふつうだった
- 4 調査季報の読み方について
テーマによって読んでいる
- 5 調査季報には、行政研究欄
などで自分で調査・研究して
いる論文を発表する場があり
ますが、ご存知ですか。
- 6 今後調査季報で取り上げて
欲しいテーマがありましたら
お書き下さい。

○都市と芸術

○都市と宣伝

○行政の辺境

○横浜学

○横浜の若者

7 調査季報に対する希望・意見を
お書き下さい。

まさにトレンディにエコロ特集、しかも二号にわたってとびつくりしました。しかもエコロジーを論じる上では一つの極とも呼べる一二七の手法が掲載されているのに又びつくり。内容、語句に政治的な内容が入らなければかなりの内容のものが行政の出版物に載せられるものだと感じました。公平な立場に立つならばエコロジーム批判の立場に立った論も載せてしかるべきだと思いました。景山民夫批判の栗本慎一郎氏のみならず、エコロジームについて論じる人は多いと思えます。△あとがき▽の加藤氏の言葉を借りるのならば、真にこれらの課題を解決するには現在の「快適な」生活をエンジョイすることしかないかもしれないのですから。

△あとがき▽

身近なまちが、とくに切実な意味合いをもっているのは、子育て中の親や、日常の生活環境を自ら選択できない子どもや老人、障害者の人々にとってではないだろうか。もちろん、暮らすが食うに困るとかいいうことではないし、個々の家庭は電話やテレビやパソコン通信網でネットワークされているから、身近なまちへのかかわりが暮らしに必要不可欠とはいえない。しかし、はじめて赤ちゃんを育てている親が、不安の中で求めているのは、となりの先輩母親の暖かい励ましやアドバイスであり、子どもたちは、まちの中の草木や小動物たちとのかわりや、友だちの家との行き来の中でリアルな体験を積んでいく。体の不自由な人たちが、徒歩園の中に友だちと交流できる場があれば、どれだけ心強いだろう。家族が病気の時に、ちょっとした手助けが得られればどれだけ助かるだろう。

そのような思いがふくらんで、様々なまちづくりの活動があちこちで行われている。乳幼児を

もつ母親たちの子育てグループもこのところ増えてきて全市で、七百にのぼる。文庫活動も数に於いて全国一という。障害者の人たちの生活を支える地域作業所も数多いし、困った時の助け合いグループもこの数年でいくつもできてきている。住民の参加や自主運営を求める公園づくりの活動もある。自主的で任意に、まちへの熱意や愛着をベースに展開されているこれらのまちづくり活動があることを、まづ私たちは、しっかりと知る必要があると思う。

さて、横浜市は、身近なまちへ十分な視線を配ってきたとはいえない。大規模な人口増という宿命的な負荷を背負ってきた中で、市民生活に直結した保健福祉、文化、教育、生活環境などの公的サービスは、これからきめ細かく行われていくことになる。

一九九〇年度は、そのような中で、身近な地域施設の建設を通して、市が地域施策を本格的に展開しはじめた元年といえよう。今後、市は地域住民のまちへの愛着や熱意を生かした形で、

どのようなまちづくり行政を展開していくべきなのか。行政の計画プロセスの問題、施設の運営の問題、参加のシステム、区行政のあり方など問われるべき課題は数多い。

今回は、編集の作業に多くの方々の参加をいただき、様々な立場からご執筆、発言を頂いた。編集の過程でできるだけ議論を積み重ねることも心がけた。試行錯誤と失敗を恐れず、が、まちづくり行政マンの心得の一つであるようだ。引き続き多くの議論と実践を期待したい。

お忙しいところご協力頂いた方々、ほんとうにありがとうございました。

△中川▽

「調査季報」は職員が自由に意見を発表し討論する行政研究誌です。「行政研究」への投稿も歓迎します。二〇〇〇字詰五〇枚以内。都市科学研究室まで（電話六七一一二〇一九）

この「読者のページ」へもご投稿ください。市政、都市問題、自治体問題等、題材は自由。一〇〇〇字以内。

調査季報アンケート

今後の参考にしたいので、次のアンケートにお答え下さい。該当する項目に○印をするか、ご意見をお書き下さい。

1 今回の特集テーマについて

- (1) 興味があった
- (2) どちらともいえない
- (3) 興味がなかった

2 今回の執筆者について

- (1) 学者・専門家をもっと増やして欲しかった
- (2) 横浜市の職員をもっと増やして欲しかった
- (3) 他都市の職員をもっと増やして欲しかった
- (4) 市民をもっと増やして欲しかった
- (5) その他（具体的に _____

3 今回の内容について

- (1) 専門用語が多くて理解しにくかった
- (2) 読み易く解り易かった
- (3) やさしかった
- (4) その他（具体的に _____

4 調査季報の読み方について

- (1) 毎号必ず読んでいる
- (2) テーマによって読んでいる
- (3) 目次だけは目を通して読んでいる
- (4) 殆ど読んでいない
- (5) 初めて読んだ
- (6) 後で参考になるものを読む
- (7) その他（具体的に _____

5 調査季報には、行政研究欄など自分で調査・研究している論文を発表する場合がありますが、ご存知ですか。

- (1) 知っている
- (2) 知らなかった

6 今後調査季報で取り上げて欲しいテーマがありましたらお書き下さい。

7 調査季報に対する希望・意見をお書き下さい。

◎ よろしかったらお書き下さい。

所属または住所

名 前

年 代 10代 20代 30代 40代 50代 60代以上

性 別 男性 女性

提出先 〒231 横浜市中区港町 1 - 1

横浜市企画財政局都市科学研究室

☎ 045 - 671 - 2029